

MONTHLY

世界の視点で情報を発信する総合誌

2015  
10  
OCTOBER

# KōRON

発行・株式会社財界通信社 平成27年10月1日発行 毎月1回1日発行 第48巻10号 昭和47年11月10日第三種郵便物認可

## 「こうのとり」打ち上げ成功 宇宙センターへ物資搬送



月刊公論



**長尾和宏**  
(ながお かずひろ)  
医療法人社団裕和会理事長、  
長尾クリニック院長

1984年 東京医科大学卒業、大阪大学  
第二内科入局、医学博士(大阪大学)授与  
1991年 医学博士(大阪大学)受取  
1995年 兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。現在に至る  
日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、全国在宅療養支援診療所連絡会理事、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授(高齢総合医学講座)

【著書】  
日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、指導医、日本在宅医学学会専門医、日本禁煙学会専門医、労働衛生コンサルタント  
【著書】  
『平穀死・10の条件』(ブックマン社)、  
『抗がん剤・10のやめどき』(ブックマン社)、  
『胃ろうとうと選択』(しなの花効道)、  
『がん人・病院信かない人』(P.H.P研究所)、  
『主婦の友社』  
など多数。

【著書】  
スーパー総合医叢書・全10巻の総編集  
(中山書店) 第一巻「在宅医療のすべて」、第二巻「認知症医療」など多数。

# 『がんもどき、はあるか?』 「近藤誠理論」

さて、この3年ほど、「がんもどき」とか、「がんは放置したほうがいい」という内容の本が軒並み売れている。すべて慶應大学・元講師の近藤誠医師が書かれた本だ。最近は「医者に殺される」、「薬に殺される」などとエスカレートすると、多くのメディカルアガリスが市販の支持を得ている。現実にがんに関する本を買い求めたが、近藤誠氏が書かれた本を開くと、「がんもどき」や「がん放置療法」という言葉が繰り返し登場する。私のクリニックでがんが

見つかっても「先生、私のがんはがんもどきですか?」とか、「先生、私はがんを治療せずに放置します」という人が時々おられる。もう90歳を超えてるのであれば、もう何でもアリだろうが、もし50歳代や60歳代で、充分助かる範囲のがんであれば、助けかる命も助からなくなる。実際に罪深い本だなと思うことがある。

「がんもどき」はあるか?そもそも「がんもどき」という言葉を使う人は世界中で一人しかいない。しかし仮に「がんであるが、あまり悪さをしないがん」と定義するならば、結構ある。ゆっくりがん、のんびりがんは放つておいてもなかなか死れない。甲状腺がんや前立腺がんなど

がその代表だ。一方、近藤氏は「本物のがん」という言葉も使う。初期の段階から全身のあちこち転移しているタチの悪いがんのことだそうだが、これもある。どちらもあるのだが、どちらかしかない、だから全てのがんは放置せよ、と言うから話がおかしくなる。実は両者の間がいくらでもある、「近藤誠理論」を、「がんもどき理論」に基づいた「がん放置療法」と定義してみよう。近藤誠理論を書いた本はベストセラーになっているが、医学論文としては発表されていないので医学界では一切認知されていない。しかし強烈な国民的支持を得ている。それはがんの過剰医療に対する国民の怒りの表現であろう。私はこれを「近藤誠現象」と呼び、がん医療界は反省すべきだと訴えている。8月に「近藤誠理論」の真偽を○×△で示し、後悔しないがんとの共存方法を解説した。発売2週間で3刷りになつたが、興味のある方はご一読願いたい。

(ながお・かずひろ)

# がんを放置するとどうなる? を検証する

医学博士 長尾 和宏

がんは国民病だが自分だけは例外?日本人は2人に1人が一生のうち一度はがんになる。そして3人に1人はがんで死んでいる。今、この記事を読んでいるみなさんも50%の確率でがんになる。あまり実感がないかもしれないが紛れもない現実だ。

がんは最もありふれた病気。珍しくもなんともない。しかし、いざ自分ががんが見つかったらみんな大騒ぎ。「どうして私だけが?」「なにも悪いことしていないのに?」「死ぬのかなあ?」と右往左往する。がんセンターの一番偉い先生でさえ、「がんセンターの医者ががんになって初め分かったこと」みたいな本を書くが、「じやあなにかい、今まで患者の気持ちを分らずにやつていた人間は、なんでも自分だけは例外だと思っている。自分だけはがんにならないし、死はない。それくらい楽観的なので少々辛いことがあって生きられる。しかしイザ、がんと言われた時に慌てないために、普段から多少はがんの基礎知識を備えておくべきであろう。

徐々に衰弱していく状態を指す。誤解してはいけないのは、アチコチにモリモリと増殖するとともに全身がんな状態なのか?、末期がんとは、がんが、あちこちの臓器に転移して施しても全員旅立たれて、悔し泣きしたことあった。

そもそも末期がんとは何か?、どんなん状態なのか?、末期がんとは、がんが、あちこちの臓器に転移してモリモリと増殖するとともに全身が転移巣があるだけでは末期がんと言えないこと。たとえば乳がんが全身の骨に転移したままホルモン療法で10年近く元気に仕事をしていた女性がいた。彼女は骨シンチを撮ると全身にがんの転移だらけ。しかし、10年近く転移巣はそのまま大きくならなかつた。がん病巣はあちこちに散らばりそれなりの大きさになつても、ある時点から休眠モードに入つたのか。だから彼女は10年近く生き

た。しかし、ある日から高熱が続いた。冬眠していたらう全身のがんが何故か一斉蜂起はじめたのか。みると衰弱して、在宅医療に移行のよう働きながら、ひとつの疑問を抱えていた。「なぜ人は末期がんになると死ぬのか?」「もしかしたら末期がんのまま長く過ごす人もいるのではないか」など想像した。しかし末期がんの人はどんなに医療を施しても全員旅立たれて、悔し泣きしたことあった。

それでも末期がんとは何か?、どんなん状態なのかな?、末期がんとは、がん細胞から体を弱らせる毒素の量も増えて、筋肉は衰え、食事量は落ち、全身の機能が低下する。そんなん状態を末期がんと呼ぶ。余命でいえば、医者が余命1~2ヶ月だと徐々に衰弱していく状態を指す。誤解してはいけないのは、アチコチにモリモリと増殖するとともに全身が転移巣があるだけでは末期がんと言えないこと。たとえば乳がんが全身の骨に転移したままホルモン療法で10年近く元気に仕事をしていた女性がいた。彼女は骨シンチを撮ると全身にがんの転移だらけ。しかし、10年近く転移巣はそのまま大きくならなかつた。がん病巣はあちこちに散らばりそれなりの大きさになつても、ある時点から休眠モードに入つたのか。だから彼女は10年近く生き

た。しかし、ある日から高熱が続いた。冬眠していたらう全身のがんが何故か一斉蜂起はじめたのか。

研修医時代、末期がんが続々と搬送されてくる野戦病院でコマねずみのよう働きながら、ひとつの疑問を抱えていた。「なぜ人は末期がんになると死ぬのか?」「もしかしたら

2ヶ月間に増殖期間を経て最期を迎えた。

がん細胞から体を弱らせる毒素の量も増えて、筋肉は衰え、食事量は落ち、全身の機能が低下する。そんなん状態を末期がんと呼ぶ。余命でいえば、医者が余命1~2ヶ月だと徐々に衰弱していく状態を指す。誤解してはいけないのは、アチコチにモリモリと増殖するとともに全身が転移巣があるだけでは末期がんと言えないこと。たとえば乳がんが全身の骨に転移したままホルモン療法で10年近く元気に仕事をしていた女性がいた。彼女は骨シンチを撮ると全身にがんの転移だらけ。しかし、10年近く転移巣はそのまま大きくならなかつた。がん病巣はあちこちに散らばりそれなりの大きさになつても、ある時点から休眠モードに入つたのか。だから彼女は10年近く生き